

雪解川

山田真砂年

春月の低きになれば斯く大き

雪解川曲がらんとして鬨ぎ合ふ

青墨の山連なりて春の雨

残雪の匂ふ信濃にマスク取る

雪形の鳥や峠を風抜ける

銀しろがねの春雨信濃に塩の道

下萌えのすでに葦を想はせし

春風の山越えてゆく三千風忌

梅の香やじいんじいんと耳鳴りす

犬ふぐり我が影の中三、四十

風が磨く空の蒼さや花辛夷

日々落つる椿の音をうつうつと